

岡山市埋蔵文化財発掘調査速報展2021

と き 令和3年10月28日(木)・29日(金)
ところ 岡山市役所 1F 市民ホール

三手（庄内幼稚園）遺跡 岡山市北区三手

三手(庄内幼稚園)遺跡は過去に発掘調査が実施されており、検出された遺構や遺物から弥生時代から室町時代にかけての遺跡とされています。

今回の調査は認定こども園建設に伴うもので、柱穴列や溝を検出しました。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、亀山焼、備前焼、白磁、砥石、動物骨が出土しています。検出した柱穴列や溝の埋没時期は土師質土器の様相から13世紀中葉から後葉になるとみられます。

今回の調査では主に鎌倉時代の遺構を捉えることができました。過去の調査成果と合わせると弥生時代から飛鳥時代にかけて散発的に集落が形成され、平安時代には活動が希薄になります。そして鎌倉時代に再び集落が営まれます。鎌倉時代における遺跡の中心は現在の幼稚園舎の西側に集中すると考えられます。その後は集落が形成されず、水田として土地利用されます。

造山古墳 岡山市北区新庄下

史跡造山古墳は墳長350mの古墳時代中期の前方後円墳で全国第4位の規模を有します。岡山市教育委員会では平成26年度より造山古墳群の保存整備事業の一環で範囲確認調査を実施しています。令和2年度は墳丘本体に大きく踏み入り、後円部の第1段および第2段テラス(平坦面)を発掘して墳丘に樹立する埴輪列を初めて検出しました。これまでテラス上の埴輪列は、その有無を含め、埴輪自体の大きさ、樹立間隔などに関し様々な可能性が想定されてきましたが、実際の調査で出土した意義は大きいです。

調査区では、円筒埴輪の基底部(根本部分)が残されており、それらが上と下の両方のテラスで確認されました。また、円筒埴輪の破片を整理すると元の形に復元できた個体がありました。径は30~40cmで、高さは80cmを測ります。当時の古墳の姿として、幅6~7mのテラスには間隔を密に円筒埴輪主体の埴輪列がめぐっていたものと考えられます。その数は何千個体のにのぼるでしょうか。また、列には朝顔形埴輪の他、形象埴輪として盾形埴輪、蓋形埴輪などが含まれており、墳丘を盛大に飾ったものと推察されます。

金蔵山古墳 岡山市中区沢田・円山

金蔵山古墳は操山丘陵のほぼ中央、標高100mほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長約158mを測り、古墳時代前期末から中期初頭ごろに築造されたと考えられます。平成23年度から史跡指定を目指し測量調査、範囲確認調査を実施しており、墳丘に造り出しや島状遺構、方形壇などの付属施設が存在することや、くびれ部から前方部側の墳端の状況が明らかになってきています。また、調査に伴って出土した埴輪も多種多様です。

今回は後円部東側において、第1段と第2段のテラス(平坦面)や墳丘の端の部分を発掘しました。その結果、テラスでは埴輪列が確認され、埴輪が密に並べられた痕跡が残されていました。また、同じく検出された各段斜面の葺石は、調査区によって底の石に40~50cmの大きな石材が使われていたり、作業単位の境がみとめられたりするなど、その詳細を把握することができました。こうした

埴輪列や葺石の検出状況からは、古墳の完成当時の荘厳な姿を思い描くことが可能となります。

